

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

3 キャンパス時代の図書館体制 —— 龍谷大学の場合 ——

村上 美代治

1 新学部設置と3キャンパス時代の幕開け
私立大学にとって18歳人口の急増急減期への対応や文部省の高等教育計画、臨教審答申、大学審議会への設置は大学経営に少なからずインパクトを与えています。私立大学のスクラップ・アンド・ビルド政策が臨教審路線である競争の原理に基づいて強行されようとしています。このため、各私立大学では、財政基盤の強化、管理運営の強化をはかりながら国際化、情報化を全面に押し出して特色ある大学づくりを目指してこの危機を克服しようとしています。

龍谷大学では、国際化の進展、高度情報化社会の到来をもにらみながら、近年さまざまな改革が目白押しに実施されてきています。とりわけ一番の目玉とされてきたのが学部増設であります。1985年1月に滋賀県から理工学部の新設誘致の申し出があり、本学も以前から文科系総合大学から理工系をも併せた総合大学への脱皮を希求していたこともあって、1986年9月急遽決定され、着工されてきました。

多くの課題や困難のなか、本年4月大津市瀬田地区に本学にとって3番目のキャンパスが開校され、理工学部と社会学部が新たに設置されることになりました。理工学部は数理

情報学科(入学定員100人)、電子情報学科(80人)、機械システム工学科(80人)、物質化学科(80人)の4学科340人であり、社会学部は社会学科(120人)、社会福祉学科(80人)の2学科200人です。大学運営は3キャンパスに分散されたなかで教職員の意思疎通、合意形成をはかりながら実施していかねばなりません。事務組織については深草学舎を中心とした集中管理分散方式を運営の原則にしておこなわれることになっています。

2 瀬田図書館の設置

理工学部・社会学部の学生はこの瀬田キャンパスで入学時から卒業時まで一貫して教育を受けることになっています。当然ながら、設置される図書館の役割も単に専門図書を収集し、奉仕するという専門課程のための図書館のみならず、一般教育図書をも収集して奉仕することになっています。図書館は地上2階地下1階の建物で総延面積は3200㎡です。丸善の図書館情報システムCALISのソフト導入によって全館トータルシステムを構築し、情報の一元化をはかります。蔵書は一般教育学、理工学、社会学、社会福祉学関係を中心にして収集され、データベース化されて利用に供されることになっています。図書はすべて開架書架に配架されます。検索は従来

の目録カードに代わってコンピュータ検索となります。更に、利用者の管理はIDカードによって入館チェックから館外貸出までをすべてコンピュータで処理されます。

3 3図書館の協力と連携

一般に複数キャンパスを持つ大学では図書館のみならず、一般事務においても十分な意思疎通を計ることが困難となり、業務がスムーズに流れない、効率が悪いなどの指摘がなされています。しかしながら、本学も3キャンパス体制を敷く以上、全学的一体制の保障は必要不可欠な課題と言えます。

このことは、当然、既存の深草・大宮図書館とは違った特色を持った瀬田図書館が追求される一方、龍谷大学図書館として共通の基盤が求められます。深草図書館が社会科学系図書を中心とした収集をおこない、専門図書館を志向した活動をおこなっています。これに瀬田図書館が加わって3館時代の到来となります。本学では、従来から分館制度は取らずに各館が独立館とした形で全学の方針のもとで相互に協力しながら運営されてきましたし、今後もこの方針でおこなわれます。

4 3館時代の運営と相互協力

大学図書館界では、近年、膨大な情報が加速的に生産され、情報を取り込む速度の遅れ、情報を収容するスペース不足や生産される形態の多様化によって利用者のニーズに即座に対応できないなどの厳しい状況に直面しています。また、図書館界を取り巻く状況も激変してきています。今後、利用者ニーズ、経費節減、合理化要求などの中で電算化導入の圧力は一層強まってくるでしょう。

既に、学術情報システムが稼働し、多くの図書館と接続してきているなかで、本学では当面3館のシステム化が緊急の課題になるであろうと考えます。3館は図書館の成立・発展の違い、蔵書数の不均衡、収集方針や収集計画の違い、整理方法の違い、奉仕方法の違いなど個々の課題や特色を有しています。現実を直視した上で、各館の特色を一層追求していく一方、個々の弱点を補完し合う必要が生じてくるでしょう。各館には良い意味での緊張感が生まれることが望めます。1館ですべての資料要求に応える事は現実には不可能であり、そこには自づと相互の協力が生じるでしょう。マニュアルによる相互協力から3館のシステム化へ、そして最後には全国的なネットワークへと輪を大きく広げていきたいと考えます。また、資料の相互協力のみならず、人材についても追求していく必要があるでしょう。これこそ図書館活動の幅を広げることになるでしょうし、資源共有の理念の具現化に他ありません。研究者間にインフォーマルな情報のやり取りがあるように、図書館員にとっても多くの連絡網が張り巡らされることを切望します。公的な相互協力の動きが全国的に活発化してきている状況の中、私的な面においても活発化していくことを期待しています。この意味で、大学図書館問題研究会京都支部が編集作業を始めた年報『京都の大学図書館白書』（仮称）の発行は非常に価値ある事業となることを確信しています。この年報を積極的に業務のなかに生かしていきたいと考えています。

（龍谷大学図書館）

— 書評 —

「大学生の読書問題とは何か」 宮 腰 賢編

篠原俊夫

本書は全国大学生生活協同組合連合会の主催の第2回大学生の読書生活・シンポジウムの記録である。第一部は大学や大学生協、出版

関係者等、7人の講演記録からなる。第二部は第一部の講演内容をふまえた討論で構成され、別に資料編として、22大学、3700人の大

学生を対象とした読書に関するアンケートの集計結果が付されている。

本書の編者であり、生協連合会理事でもある、宮腰氏によるアンケート分析によって現代の平均的学生の読書生活を描いてみると、以下のような、やや絶望的な状況が浮かんでくる。即ち、「一日の平均の読書時間が49分で、3年間の調査に比べ7分減であるとか、印象に残った本のトップがおなじみのテレビドラマの原作「伊達政宗」（山岡荘八）であり、その文庫本を2人に1人は自分の部屋で寝ころんで読み、4人に1人は電車の中で読むとか、定期講入誌の上位10誌中6誌までがマンガコミック誌であり、「少年ジャンプ」は2割もの大学生が読んでいる」のが、平均的大学生江分利満君の読書生活ということになる。しかし、こうした数値から「今日の大学生の読書生活」の実像は見えてこないと宮腰氏は言う。その根拠として読書に関して、本を読む大学生と読まない大学生の間に極端な二極分化現象が見られるからである。即ち、「一日の読書時間についていうなら、殆どないという大学生が17.2%に達する一方で、1時間以上という大学生も17.7%に及ぶ。1年間の読書量にしても、0冊の大学生が1.6%いる一方に、101冊以上の大学生も3.5%いる。これを層別にみると、読まない層の平均9.2冊から読む層の54.4冊までという開きなのだ」

確かに、この数値をもって平均的な大学生の読書生活を論じるには無理がある。この事実、はからずも日本人の平均的貯蓄額のからくりを思い起こさせる。富める者は極端に富み、貧しい庶民はどこまでも貧しいという二極分化の構造の中でむりやり平均値を求めてみたところで大した意味がない。一ヶ月に読む冊数が何冊であろうと、読書が好きという学生は放っておいても心配ないと言える。問題は自発的に読書する習慣が全くなかったり、意欲が極めて希薄な学生をどうすればいいかということである。本を読むということは、「生まれながらにして」できる

ことではなく、学習によってその技術なり、力量を身につけるといふことに他ならない。学校においては端的に読書指導が、家庭においては幼児期から始まる。親の子に対する読み聞かせなどが広い意味での読書教育になっている。そこに個人的な資質や環境などの要因が加わることによって様々な読書人が生まれてくると考えられる。読書する能力が生得のものではない以上、個人の努力に委ねるだけでは不十分で学校教育に限らず、機会をとらえては何らかの指導を行うべきだというのが一般的な考え方であり、このシンポジウムの参加者においても例外ではない。なかでも岩波書店の安江氏は大学の読書指導に期待すると明言している。とは言え、そもそも大学生をつかまえて、いまさら読書指導でもあるまいという根本的疑問が生ずるのも事実である。なにより読書の習慣は遅くとも義務教育年代までに、百歩ゆずっても高校時代までに身につけなければどうしようもないという気がする。また読書指導の教育的効果に関して、功罪相半ばする面がある。例えばいつも物議をかもしている課題図書は、果たして子供達をして読書の喜びにめざめさせる効果があったのか、それとも強制された読書が読書嫌いに拍車をかけただけだったのか。生松敬三は「現代青年にとっての読書」（青年心理 25号 '82）と題する論文のなかで、高校の図書館担当の先生の会合に招かれて書物について講演したとき、「読書指導などということはあまりしない方がよいのではないか」という暴論を吐いて大いに反撃をこうむった」と述べている。生松は自分の経験から高等学校の教科書があまり懇切丁寧につくられていて、それが教わる側の自発性がかえって封じられてしまうのではないかという危惧を抱いていたことが一つの理由であるという。生松の考えでは本嫌いの子がいたって当たり前だし、それに本を押しつけたっていっそう本嫌いを強めるだけのことになるのではないか。それよりあまり型通りに教育的ないし教育者的でありすぎることの害悪の方が大きいのではない

いか、案外放っておけばひょんなきっかけから本好きになるかもしれない子をかえて速ぎける」かも知れないということになるのである。

教育することと個人の主体性、自発性を重んじることの間には千里の径庭がある。だから教育という名目のもとに、結果的に多くの勉強嫌いを作ってしまうこともある。読書指導が読書嫌いを産みだす直接の元凶だとは思わないが、読書における自然な出会いから生まれるより大きな感動の機会を奪ってしまう結果に終わっていることに留意しなければならない。しかし、あからさまな押し付けの読書指導に異議をさしはさむ生松も講義が一種の読書案内の場であり得ることを否定しない。

大学生の読書に限定して考えれば、ある程度結論めいたものがでてくる。やや大胆に整理してみると以下のようなことになろうか。

①大学における講義の場で教官が機会あるごとに読書の魅力を説く。その際、推薦したい図書を具体的にあげて、生協書籍部や図書館の利用をすすめる。「機会あるごとに」ということの中には、例えばレポートの提出を求める形での義務的読書等も含まれる。

②大学図書館の蔵書や生協書籍部の品揃えを魅力あるものにする。大学図書館の蔵書について言えば専門書の偏重をやめて、一般教養書についても公共図書館に見劣りしないくらいくらい充実したコレクションを持ちたい。

生協書籍部の品揃えについても贅沢を言えば際限がないが、例えば梅田の紀伊国屋書店くらの規模があれば欲しい図書は殆ど店頭で手にとって見ることができただろう。

③大学図書館と生協書籍部の双方に書籍に詳しい職員を養成し、配置する。分かり易い例をあげれば、神田神保町あたりの老舗の古本屋の主人でもいいし、京都なら寺町あたりの何代にも渡って商いしている、これも頑固一徹と見える古本屋の主人の顔を思い浮かべるとよい。試みに彼らに店頭の書籍について質問してみるといい。その並々ならぬ知識に驚かされるはずである。反町弘文荘の主人、反町茂雄は殆ど書誌学者といった趣さえ感じられる。反町茂雄には及ばずとも大学図書館や生協書籍部にあって学生の読書に深い係わりを持つ者が、図書に関する専門家であることは必須の条件である。

④本来、もっとも読書に熱中すべき高校時代が受験勉強におわれて、読書に割くべき時間が大幅に犠牲にされている。受験制度に係わる問題であり、改革は安易ではないが真正面から取り組むべき課題である。

以上、結果的には書評にことよせて私の勝手な読書論めいたものに終始してしまった。大学生協が読書をここまで深く立ち入って分析し、一定の指針を示されたことに敬意を表したい。

(京都大学医学図書館)

学生・教員・図書館員

—— 第2回大学図書館政策討論集会 ——

大学図書館問題研究会の第2回政策討論集会在が3月11、12の両日、京都の本能時文化会館で開かれ、全国委員を中心に32名が参加しました。

大学図書館問題研究会では、大学図書館の発展は、図書館員だけでなく、大学の教員や学生との協力共同のもとでこそ可能、との考えに立って運動をすすめてきましたが、この方向を一層推進するために、大学図書館の現

状と課題、考え方を具体的に示した「大学図書館政策」をまとめ、利用者に訴えていくことになりました。

そこで、1987年の第18回大会直後に、大学図書館政策委員会を発足させ、以後ほぼ月1回の開催を継続し、この2月18日で19回におよんでいます。この間、第1次中間報告を昨年4月の第1回政策討論集会上でおこない(『大学の図書館』1988、4参照)、今回は第

2次中間報告となります。

これまでの政策委員会の討議には、12名が参加し、第18回大会の討議資料『国民の要求にもとづく大学図書館の総合的発展のために』（骨子）の各項目の見直しを中心におこなわれ、また時々的重要な問題を取りあげて集中的にとりくむことも、あわせてすすめてきました。

今回の報告は、第1回以降に討議されてきた次のテーマに関するもので、酒井委員長がおこない、一部を岩本事務局長が担当しました。①図書館の自由、②図書館施設、③収集・整理・保存、④職員問題、⑤学術審議会「審議まとめ」、⑥生涯学習と図書館。

2日間にわたる討論の要点は次のとおりです。

○ 大学図書館にとって今後の焦点になるのは図書館の保持する情報量をいかに増やすか、ということである。大図研として「設置基準」について科学的検討を加える必要がある。

○ 労働力の再編成のために高等教育の見直しがおこなわれているが、これには「学習権の保障」を対置しなければならない。日本の大学はこれまで教育に不熱心だったといえるが、最近、その様相が変りつつあり、大学図書館としてこれを支援するものは何か、文献利用指導など理論研究と実践が必要である。

○ 図書館員としての力をつけよう。資料論選書論が遅れている。この場合、一人一人の力だけでなく「職員集団」としてのサービス強化、力量アップが大切である。このため、大学図書館員の研修のためのカリキュラムが必要である。

○ 政策「骨子」の基本的立場を明確に打出すべきである。その場合、教員や学生との協力共同の内容を具体的に示す。例えば教員との共同では、教学実態を知ることや主題知識についての教示を得ることなどが考えられる。

○ 自館に所蔵していない資料も提供すること——これは大学図書館の基本的問題であり、「決定的」といってもよい。そしてこの、「さ

がす過程」を記録にとれば、検索、分担収集、相互利用、諸手続き、図書館員の姿勢等々にかかわり、改革の契機をつくり出すことにつながる。

○ 学生の利用をのばすことの重要性をもっと鮮明に出す必要がある。「教授会自治」には図書館員も苦勞しているが、「国民のための大学づくり」とっては「全構成員自治」でなければならない、この反省から学生利用の問題も出てきているのである。

○ 主題研究ともかかわるが、各館で参考図書目録を作成し、相互に評価しあうことを試みてはどうか。

○ 教員層との協力を追求して、学生の貸出がのびたというより、学生の資料要求に応えたり、開架制をはじめ利用条件を改善することが大きい。「全構成員自治」といっても、全構成員との協力のもとでとりくむべきものと、図書館独自に追求すべき部分と、この両面がある。これは「政策」として整備する必要がある。

○ 大学は高等教育機関とされるが、研究者の研究もこれに包括されるのだろうか。医学や工学の分野と人文・社会系と区別して考えた方がよい。ある大学では、まず「教育者」という考え方だが、現実に個々の教員の意識は「研究者」である。しかし学生の状況から教育のことを考えざるを得ない事態もある。

○ 政策的課題を考えるために重要なことは、研究偏重・教授会自治にたいし、まず教育を重視することである。

最後に酒井委員長がまとめをおこないました。

大学図書館の改善のためには、図書館員の中だけで分かりあっていてもだめであり、他階層への提起として政策を考える——これが政策討論の出発点である。

今回は、政策の「骨子」の総論部分、考え方の基本になる部分について議論がおこなわれた。教員との協力の問題、教育論、貸出をのばすことの意義、図書館員の力量、とくに

集団としての力をつける問題などである。

各論的には、参考図書目録の比較研究、図書館員教育のカリキュラム、留学生や国際化、週休2日制の問題などが出たが、状況の変化に応じて補強していく必要がある。

いま問題点を出すと同時に、大図研としての見解、主張が求められており、一応の整理をしたうえで、また議論していきたい。

(S)

京都府アジア・アフリカ・ラテンアメリカ 連帯図書館のプラン

「民族自結・民主主義・社会進歩のためにたたかうアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民との連帯」を掲げ、運動を進める京都府アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会（京都府AALA）が、新しい事務所（中京区夷川通衣棚角、エビスビル2F）を設置した機会に、運動と結びついた「連帯図書館」のプランの具体化をはかっています。

京都府AALAでは、日常の国際連帯運動、とくにその図書館活動に、図書館の専門家の協力をよびかけており、また、図書館員の立場からも、市民の自主的な運動が求める図書館的機能を具体的に考え、その方法の開発に創意を発揮してみるよい機会だと思えます。

次に京都府AALAで、いま計画されている「連帯図書館」構想の概要について紹介してみましょう。

I. 「連帯図書館」の意義

国際連帯運動に必要な情報や資料を収集・組織化し、それを基礎とする積極的なレファレンス活動によって、日常の学習・研究・連帯・交流、機関誌活動等に役立てる。また京都アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会の活動を記録し、保存する。

II. 資料の収集とレファレンス

(1) 基本

1. 既存の資料についての調査を徹底し、情報ファイルを完備する。
2. 活動に役立つものを入手、コピーまたは作成する。

(2) 資料の種類

1. 情報ファイル（カード、フロッピーディスク）

2. 地図

3. 音を記録したもの（レコード、テープ）

4. 映像（写真、スライド、映画フィルム、ビデオテープ）

5. 図書（基本的なハンドブック類）

6. パンフレット（とくに解放組織の刊行したもの）

7. 雑誌

8. 新聞（切抜）

9. 作品（絵画、ペンダント、バッジ等）

10. 活動記録（レジュメ、ビラ、集会ポスター、写真、新聞切抜、機関紙等）

(3) レファレンス

1. 活動に必要なテーマを事前に選んで、資料を積極的に編集、作成する。

2. 会員の質問に応じて、情報や資料を提供する。

III. 組織・財政

- (1) 運営委員会

- (2) スタッフ

- (3) ネットワーク

- 国内 大学図書館、専門図書館、国際関係団体等

- 海外 国立図書館、大学、研究所図書館等

- (4) 財政

- 一般予算

- 寄付

IV. 備品・機器

- (1) 書架

- (2) 印刷機

(3) パソコン (ワープロ)

(4) ファックス

以上の概要にもとづいて、日常の活動の有様を思い描いてみると、次のようになります。

まず新聞の切抜が基本資料として重要です。民族解放運動、資本主義諸国の労働運動や市民運動、社会主義諸国の改革運動など人民の運動に焦点をあてて、その発展の記録を地域別、国別に系統的に蓄積します。これらは、現在週刊で発行している『世界の動き (日誌)』と対応させることによって、利用しやすくなります。

新聞記事については、既存のデータベースの利用も考えられますが、経費の面と、より根本的には、運動団体として、切抜や索引づくりの具体的な作業を通じて、自ら歴史感覚をときずませることに役立たせるために、あえて旧来の方式をとります。

世界情勢の日々の変化、発展に注目していると、そこにさまざまな疑問や探究心が湧いてきます。そこで、あるテーマをきめて学習や研究をおこなうことになるのですが、その際の文献調査や、ある程度まで論点整理ができるように資料や情報を日常的に収集し、組織化しておくのです。

この場合、特定のテーマに直接応える調査とともに、整備し形成しつつある図書館機能を活用して、多様なドキュメンテーションを日常的に行うことも大切です。思いつくままにあげてみると、――

- 各国の民主勢力の現状認識、政策、方針についての文献目録と原資料の入手
- 邦訳アフリカ文字の総合目録 (リスト

と所在) およびその紹介、批評、研究文献のリスト

- 日本におけるニカラグア文献目録
- 「地域」を主題とする雑誌の総合目録
- 日本におけるアフリカ文献掲載雑誌リスト (1984年で99誌ありました)
- 国際連帯関係機関、団体要覧――など、次々とテーマが浮かんできます。こうして作成・調製されたドキュメントは『ライブラリー・ブレティン』として会員に配布されます。

文献だけでなく、音や映像資料も重要です。毎日のテレビ・ラジオ欄をチェックして、必要なものはテープにとって、活動に生かすことができます。また外国との相互の交流の際に、きちんとしたインタビューをおこなってテープに記録することもあとで役立つでしょう。

財政的に非力な「連帯図書館」としては、既存の図書館を活用する会員ネットワークの組織づくりが必須となります。

しかし、このような条件の中でも、各国の解放組織や国際連帯組織の機関紙やパンフレットは、入手する必要があります。会員の間で担当地域をきめ、語学学習とあわせて、各国の運動について、原資料にもとづいて紹介する活動は、連帯運動の水準を高めるものです。

以上、順不同にあれこれ書きましたが、国際連帯運動になくはならない図書館活動を生み出すために、多くのプロの図書館員の方々の力添えが待たれていることをのべ、紹介を終わります。 (S)

『大図研大学』アンケート集計結果と実施方針について

大図研京都支部委員会

大図研京都支部委員会は2月度定例委員会に於いて『大図研大学』の実施を決定しました。実施にあたって、会員の皆さんの意見や要望を『大図研大学』の運営に積極的に取り入れるために、アンケートを実施しました。

アンケートの回収率は38.3%（回答総数49）でした。ご協力下さった会員の皆さんにお礼申し上げます。

回答結果は以下の通りです。

1. あなたは『大図研大学』に参加したいと思いますか。

- | | | | |
|----------------|------------|-----------|----------|
| (1) ぜひ参加したい | 7名(14.3%) | (3) 関心がない | 3名(6.1%) |
| (2) 時間があれば参加する | 35名(71.4%) | (4) その他 | 4名(8.2%) |
- ・概説、概論的なものは要らない
 ・手が一杯でしんどい
 ・時間がなく、最後まで参加出来ない
 ・今や手遅れ

2. 参加したい科目

科目名	ぜひ参加したい	時間があれば	計
基礎科目系列			
外書購読	3	3	6
朝鮮語入門	5	7	12
資料組織論	3	15	18
参考調査資料論	6	18	24
科学史	2	4	6
専門科目系列			
資料論研究方法	6	11	17
法学文献資料論	1	2	3
経済資料論	1	4	5
英語・英文学文献資料論	1	3	4
国語・国文学文献資料論	2	7	9
日本史資料論	2	8	10
ドイツ史資料論	0	0	0
理工学文献資料論	1	6	7
整理系図書館員交流会	1	7	8
参考・閲覧図書館員交流会	2	4	6

3. 特に希望する講師、または講義内容について

- ・理工学文献資料論の講義で国際会議録の探し方を
- ・図書館員交流会で資料探索の演習を

4. 『大図研大学』で実施して欲しい研修テーマ、または運営についての意見、希望について

- ・古文書読解力が身につくもの
- ・古文書修理技術
- ・図書館史
- ・語学研修
- ・NACSIS-IR利用方法
- ・婦人問題研究動向
- ・初歩からの図書館コンピューター
- ・図書館ネットワーク論
- ・もっとみんなの意見をまじめに聞いて欲しい(?)

大図研京都支部委員会はアンケート回答結果を踏まえ、回答数6以上の科目の実施を決定しました。また、回答数が少なかった科目でも大学図書館員教育に熱心な教授の協力が得られるものは、広く受講者を公募して、開講する方針です。会員の積極的な挑戦を期待します。

また、実施して欲しい研修テーマに寄せられた意見は何らかの形で実現できるよう努力します。

なお、開講は、準備の都合で、当初予定よりも遅れることをお詫びします。